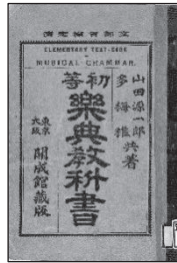
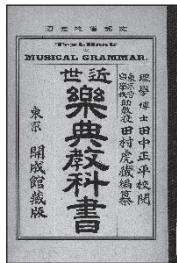
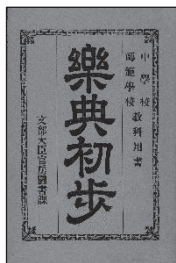


がくてんしよほ

# #5 樂典初歩

作者：文部大臣官房図書課（もんぶだいじんかんぼうとしょか）  
刊行：明治28年（1895）



※左より、『樂典初歩』、『近世樂典教科書』、『初等樂典教科書』



## ♪ 解題

### ■ 内容

『樂典初歩』は明治21年（1888）に出版、明治28年に翻刻された。現在も楽譜の理解に不可欠な規則である「樂典」は、明治16年に、西洋音楽の理論書を翻訳した『樂典』により国内で初めて出版されている。この『樂典』の出版は、音楽教育開始のために様々な調査を行った文部省音楽取調掛の事業の1つであった。『樂典初歩』はその後、師範学校の教科用書として文部省が出版したものである。

文部省は明治21年4月19日の官報で本書について、「本書ハ音楽上ノ典則ヲ最簡ノ方法ニ據リテ論述シタルモノナレハ師範學校ノ音楽教科用書ニハ殊ニ適當ナルモノナリ」として、師範学校での教科書として推薦している。内容は音符論、拍子論、音階論（全音階的長音階論・全音階的短音階論）、全音階的音程論、調及び転調論の6編に大別されている。各項目の末尾に「練習課」として5～10問ほどの問題が掲載され、解説された内容をもとに楽譜を書く練習をさせる構成である。

## ■ 作者

原著者のジェームス・カリーについて、出版時の官報には「英國教育大家ゼームス、カレー氏の原著」とあるが、著者について出自や来歴等は不明である。訳者の内田彌一（1841-1917）は音楽取調掛に所属し、『樂典』に続いて明治17年（1884）に刊行された『音楽指南』の翻訳を担当している。英語研究の他、三絃、長唄を学ぶ熱心な音楽愛好家で、洋書の邦訳や東西音楽の調査研究に活躍した。

## ■ 音楽教育の始まりと音楽理論の普及

明治5年（1872）、学制が制定・頒布された当時、下等小学の唱歌、下等中学の奏楽が音楽の教科として定められた。しかし、これらの教科の指導者や教材の準備が整わず、「当分之ヲ欠ク」と但し書きされた。

音楽教育を実施するための調査事業が必要とされ、文部省は外国人教師L. W. メーソンを招聘することを決め、明治12年10月に音楽取調掛を設立した。

音楽取調掛は唱歌集などを出版するほか、西洋音楽の理論書を翻訳して出版した。楽典はこれらの翻訳書の出版により普及し、大部分の音楽用語の訳語が整えられた。『樂典』の5年後に書かれた『樂典初歩』では「二分音符」「ソプラノ」など、現在と同じ訳語も多く使われている。

## ♪ 類似の唱歌集

- ・『近世樂典教科書』田村虎蔵編 東京開成館 1903 [SH375.97/12]
- ・『初等樂典教科書 修正版』山田源一郎・多梅稚共著 東京開成館 1904 [SH375.97/11]

## ♪ 参考文献

- ・『音楽教育成立への軌跡』東京芸術大学音楽取調掛研究班編 音楽之友社 1976 [375.7/120]
- ・『日本音楽教育文化史』上原一馬著 音楽之友社 1988 [760.7/30]
- ・『日本音楽教育史』供田武嘉津著 音楽之友社 1996 [762.1/168]